

北斎「富嶽三十六景」と広重展

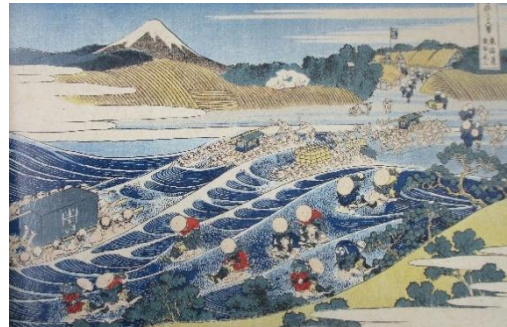
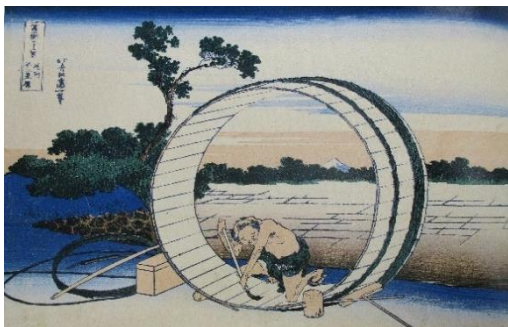
江戸東京博物館 2021.04.24～06.20

「葛飾北斎」は、富士信仰にあやかっただけで日本人のアイドル「富士山」と庶民生活を結びつけ、四季や変わりゆくさまざまな姿の「富士山」を描いている。

この浮世絵版画名作は、奇抜な構造、鮮烈な色彩で日本人を魅了すると共に、世界の芸術家達にも多大な影響を与えた日本絵画を代表する作品である。

北斎による「富嶽三十六景」は、1831～34（天保2～5）年に発行された「富士図版画集」であるが、タイトルが三十六景なのに作品が「46図」あるのは、売上が良かったため「10図追加」されたとされ、「裏富士」と呼ばれる追加10図は、主版が墨摺りなのにそれ以外の36図は在来の藍の主版である。

本展は、北斎の「富嶽三十六景」全46図が一挙に公開されるとともに、当館が所蔵する「北斎・広重」の代表作の数々も展示もあり注目されている。



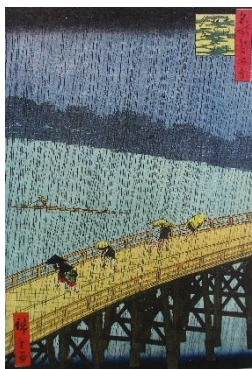
葛飾北斎 《尾州不二見原》

丸い桶の中に三角の富士が小さく見える画面は、大きな丸とその中に小さな三角の構図が描かれていて、正に奇をてらったもので北斎らしい作品である。

葛飾北斎 《東海道金谷の不二》

大井川の難所である川渡りの様子が克明に描かれて作品は、大きな波のうねりは画伯の誇張であろうか、様式美の波紋が楽しいリズムとなっている。

歌川広重 《名所江戸百景 大はしあたけの夕立》



画伯（1797～1858）は、初期には美人画や役者絵を手がけるが、「東海道五十三次」が大ヒットして一躍人気を博した絵師で、その後「名所江戸百景」「京都名所」「近江八景」などの風景画シリーズも発表している。

本作品は、画伯が最晩年になって手がけた生まれ育った江戸の隅田川の新大橋の夏の夕立の様子を克明に描写した傑作である。構図は、大胆で斬新で洒脱な感性が遺憾なく発揮されて、「ゴッホ」も模写をしたことで知られている